

初代 京山小円

■は大阪朝日新聞(朝日新聞クロスサーチ)

◎は大阪毎日新聞(毎索)

◆は『浪花節変遷史』(芝清之編)所収記事

■明治三十九年十二月二十三日 ⑨演芸

▲八千代座は来る二十六日より浮連節の大会を催すこととし 当地の親友派奨励会二代目
広沢虎吉の発起にして 集むる演芸者は同派の座長連中のみ 前後にあらざる大会にて
其の揚り高を武徳会に寄付するよし 演題左の如し

伊賀越後日仇討(広沢虎二郎) 勇婦板額(姉川好丸) 曾我物語(中川伊勢吉) 一
休怪道録(岡本鶴治) 安部晴明記(広沢菊円) 源平盛衰記(吉田奈良丸) 義士銘々
伝(京山小円) 難波戦記(藤川友春) (三味線 岡本亀之助 広瀬栄助)

■明治四十二年一月二十三日 ⑪面 演芸

▲朝日座の京山小円一座は毎夜午後五時開演の筈にて 初日の演目は「越前大評定」「勝
田新左衛門の伝」

◎明治四十二年一月二十三日 ⑨面 演芸だより

朝日座浪花節京山小円一座は愈よ本日午後五時より初日の読物は「越前大評定」「勝田伸
左衛門の記」「写真入り、説明文は「朝日座出演の浪花節 京山小円」」

■明治四十二年一月二十五日 ⑨面 演芸

朝日座の浪花節京山小円は予記の如く二十三日開場 非常なる好景氣にて見る／＼満員
となりぬ…………

■明治四十二年一月二十五日

近來メキ／＼頭を上げて講演、義太夫の墨を摩さうとするのは浪花節である、浪花節とい
ふと一口に下層社会の遊び物のやうに心得る者が多いが、近來は大分上流社会に帰依者
を持て來た。中にも大阪では京山小円を推す。その小円が一夜から朝日座で興行する、
小円の浪花節は細く長く何処までも続く声で義太夫、謡、筑前琵琶などの妙所を巧に応用
調和する、それで他の浪花節より変化が多い、雲の如く壮大な処がない代りに艶麗な処が
ある、深くはないが美しい、尚十分に研究したら益上流の最層を得るに至るであらう。一
昨夜の「勝田新左衛門」伝杯は最も彼の妙所を発揮して居た

■明治四十二年一月二十七日 ⑨面 演芸

朝日座の京山小円は初日以来連夜大入にも係はらず 二十九日限り閉場し 二月一日よ
り和歌山紀伊国座へ出勤する事に取極めしが 目下の仕打は一日より神戸大国座にて興
行せんと云ひ 双方引張風レジメの所へ 岡山高砂座よりも申し込みあり 三方とも権
利を主張し目下交渉中なりといふ 浪花節全盛の極みといふべし 又同人が本日の語り

物は堀部安兵衛伝なり

◎明治四十二年五月六日 ⑨面 記事

中座の京山小円

一昨夜より開演したる中座京山小円一座の浪花節は曩に朝日座に於て数日間大入満員の好人気なりしだけ 今回もまた初日から評判よく 当夜小円は「安中宗三郎」二席と「義士伝の勝田新左衛門」を語りたり、安中は恒川半三郎が其重役久保田伝之進の為め散散恥辱を蒙りしを 下郎なる宗三郎が其恥辱を雪ぐ為め賊を働く処をカゲとして 松原に於て主人の為め久保田伝之進を討つ処の二席なりしが 例の婉曲なる節廻しには幾度となく聴衆は拍手したるが 各種の人物を夫々活動せしめる点は同人の特色とも云ふべく京阪の聴衆には殊更能く適りし語り口なり 今回の興行もまた大入を占むる事ならん

『浪花節名鑑』（大正三年、杉岡文楽堂）↓国会

図書館デジタルアーカイブ

京山小円 本名 吉田松吉 十八番

佐倉義民伝 義士伝

浪界の三大傑と称せられ 浪花節の改善に苦心を極め。大劇場の壇上に武士道鼓吹を呻り。緞帳を前にして黒羽二重の五ツ紋。白扇右手に厳と立つて講演せしむるに至つたのは氏の与る処である。

氏は明治九年広島県尾道市十四日町に生る。

幼より芝居で御座れ浄瑠璃で御座れ 遊芸と云ふ遊芸を好み。芝居なら其台詞 浄瑠璃なら其「サハリ」を一度聞けば腹に収む。八歳にして斯界の人となり 十九歳にして。大真打となり 爾来二十年間一方の覇者 否な浪界の大立物として人をして目を聳立たしむ 氏が壇上に立つて語り出さば。自分を忘れ 而して全く語は其人物の精神になつて了ひ。聴衆をして魅せしむ。其節廻しは独特の妙味にして。節と声の調撰とは実に驚嘆の外なき天恵なり。

下図は「東西浪花節真打人気競」（大正十四年、文楽堂杉岡惣吉板）

